

海外日誌 (十二)

在米山本一清

七月七日(土)

朝九時、桑港第三街停車場より南太平洋線で出發、十時半サンノゼ灣、暫く市内散歩、日本人の町なごある。

午後四時半、乗合自動車により、山道をまがりくねりつゝハミルトン山に登る。途中のスムス溪ホテルで夕食、それから又登りつゞけて、午後八時半、山頂のリック天文臺に到着。エトケン教授の溫顔に迎えられ、直ちにドーミトリの一室に入る。——今夜は土曜の晩であるから、例週の如く、天文臺には一般來客が星を見に來てゐる。自分等は其の景況を見るため、少憩後、室から、又、天文臺に行く。臺員は皆々多忙、有名な三十六時望遠鏡では土星を見せ十二時では木星を見せてゐる。此の夜、自分はエトケン教授の紹介でムーア、ライト、タツカーなどの有名な學者たちに會つた。

七月八日(日)

リック天文臺の第一日の今日は日曜である。朝起きて見れば、自分等の室は窓が二方に開いて遠近の山野の景色が非常に好い。食堂でカーペンター君によつて他の青年學者たちに紹介され、それから、天文臺の構内を散歩する。流石に海拔四千呎の山の上で、空氣は清く、空は澄んでゐる。サンノゼ市から桑港灣の景色は殊に好い。

午前中、ムーア氏は、日曜なのに拘らず、天文臺で日食遠征、準備をして居られた。

午後四時、ライト教授の宅へテイに招かれて行く。又、夕食後はエトケン教授宅を一寸訪問。

夜三十六時望遠鏡にてヒース氏が恒星の分光観測をしてゐられるのを見、夜半ドーミトリに歸り、ケナル氏の室で暫く世間話。

七月九日(月)

今日から、自分はムーア教授の室に席を貰ひ、そこで同教授指導の下に分光寫眞を測定することとなつた。

午後三時、タカー教授の室を訪れ、同教授の近業に關する話しを聞き、それから子午環を見せられた。夜も亦、この子午線室でタカー氏の赤緯観測を見る。

午後四時からエトケン夫人宅の婦人會に招かれて行つた。

七月十日(火)

午前中、金星の分光寫眞を測定。計算について、ムーア氏は、ヤーキス流の「正式法」よりも、リック流の「標準板法」の便利なきを主張せられる。

晝食後、ヒース氏に案内せられて、トレミー丘のクロスリー三十二時反射鏡を見る。

今日、オランダのライデン天文臺長デシッター氏より來書。

七月十一日(水)

午前中、分光板測定法に關する文書を圖書室でよむ。

午後四時、トランプラー氏の宅へテイに招かれて行く。

夜、大三十六時でエトケン教授が近距離二重星を觀測せられるのを見學し、同教授の視力の非凡なのに驚く。夜半、同教授は、また近頃試験中の干涉計を見せられ、大に得るところがあつた。

英子は午後二時、タカー夫人を訪問した。

七月十二日(木)

今日から、ハルトマン分光比較計を用ひて金星の分光寫眞を測量す。

夕食後、散歩。天文臺の正面から西を眺めて、すばらしい日没の美觀を見た。

夜、九時から、トランプラー氏を訪れて、同氏の故國スイツツルのことなごを聞く。

七月十三日(金)

エトケン教授の依頼により、日本の天文學界の近狀を草してパシフィック天文學會雜誌に寄稿す。

午後、ハルトマン分光比較法に用ふる標準板の常數表などを作る。夕方、天文臺長兼加州大學總長のカンベル氏到着。フロスト氏の

紹介状を出して挨拶す。一見、小柄の好々爺である。

夜、大三十六時でムーア教授が遊星狀星雲の分光撮影をせられるのを見、その後、ツェファス氏の戸外観測を見た。

今日、ライデン天文臺のヘルツスプルング教授より來書。

七月十四日(土)

再びエトケン教授の依頼により日本天文学界の將來について一文を草し、昨日の文に附加寄稿す。その後、小犬座ア星の分光寫眞を測定。

午後、一寸ひるれ、それからライト氏に案内せられ、英子と共にコベルニクス丘に登る。

土曜なので、例により、夕方から來觀者頗る多く、一時、自動車三十五臺正面に並ぶ。

日没時、美しい太陽像を英子はスケッチする。

七月十五日(日)

朝食後、エトケン、ムーア兩家を順に訪問。それから自分は研究室へ行つて分光寫眞を測定す。

午後三時からムーア氏宅のテイに招かれ行く。

夕食後、エトケン教授の室で、二重星學界の近況をき、尙將來の研究に關する有益なる教へを受けた。それから自分は大三十六時ドーム内にムーア氏の觀測を見る。丁度そこへダンカン氏(東米エレスリー大學天文臺長)も來られ、近頃、天文學界の興味ある諸問題を談合す。

七月十六日(月)

午前中、ムーア教授に、星雲や新星の興味多いスペクトル寫眞を澤山見せて貰つた。それからセンタウル座ア星や飛魚座ベ星の分光寫眞を測る。

七月十七日(火)

今日自分等は下山するので、朝から荷物をまとめ、「さよなら」で宅まじりの挨拶をする。

午後一時半、正面から自動車に乗り、エトケン氏始め多くの人々

に見送られて出發。うつり變る景色を眺めながら山を下り、三時半サンノゼ着。汽車の時間に未だ早いので暫く市内をあるく。

午後六時十五分、南バシフィックの海岸線により、サンノゼを出發。廢臺はブルマンの上段で、英子は少々悲觀。

七月十八日(水)

朝七時四十五分ロスアンゼルス着。暫くして、九時發の電車によりバサデナに行く。十時着、直ちにサンタ・バーバラ街のウイelson山天文臺事務所を訪ひ、臺長アダムス氏に面會。種々打ち合せの後、同氏の推薦により、南レイモンド街のバサデナ・ホテルに投宿す。室は第四四八番。

午后、市内散歩。地圖をたよりに、北マレンゴ街のウオターハウス氏を訪れたところ、幸ひ在宅せられ、昨年輕井澤で一別以來の話なぞす。

七月十九日(木)

午前中、市内をあるいて借室をさがして見たが、思ひしいのが見當らず。宿へ歸つて聞いて見ると、今のホテルの室を月極ならば大に割引するとのこと、間取りや交通の便利も好いので、遂に今の室に當分落付くこと決心す。

午後、天文臺事務所に出掛ける。アダムス臺長の好意により、新館に一小室を與へられた。此の日、ジョイ、キング、ダンマーネン、アンダーソンの諸氏に面會す。

七月二十日(金)

朝八時半、バシフィック電車でロスアンゼルスに行き、メイン第一街の正金銀行で用事をす。次でサンベドロ街の日本人合同教會を訪問、小川牧師の案内で新會堂を視る。それから轉じて、東第六街に小葉竹氏を訪問、小憩の後、同道して、エルモンテ村の高岡平氏を訪れ、夕食を頂き、カーで送られて十時歸宿す。

七月二十一日(土)

午前中、オフィスに出勤。ウイリアムス・ペーから荷物が届く。午后、市内の小劇場で沙翁の「第十二夜」を観る。

七月二十二日(日)

朝十時、わざ／＼エルモンテから高岡氏の迎えを受け、カーに同乗して、ハリウダの獨立教會に行き、久しぶりで日本式の禮拜を守る。

式後、少時、カーで散歩。有名なバーナム家の「ヤマシロ」別荘を見、大喜び。それから松本氏方で一同午餐をいただく。

午後三時には、又、小葉竹、高岡兩氏の案内でリンカーン公園の鰯館を見、夕方、送られて歸宿。

夜、レイモンド公園を散歩して、會々、市内諸教會の聯合戶外禮拜に列す。

七月十三日(月)

また、朝から高岡氏に迎えられ、同車してロスアンゼルス的小葉竹氏を訪ひ、それからハリウダのエザブト劇場にカリフォルニア發見史劇を観る。

夕食は岡井氏方で頂き、それから一同、山の手の野外劇場で「キリスト劇」を見、夜十一時送られて歸宅。

七月二十四日(火)

今日も亦高岡氏に迎えられ、昨日の如く、カーでロスアンゼルス的小葉竹氏を訪れ、一同揃つて、サンタ・モニカ濱に到着。砂濱の上で輕便ランチ。それからオーシャン・パーク、ヴェニスあたり、アメリカ人の觀樂場を見、次に轉じて、レンドンドからサンベドロに出て、獨特別の日本村ホワイト・ポイントを見る。海は霞んでカタリナ島は見えない。

サンベドロから直路ロスアンゼルス市に歸り、日本食の晩食をいたゞいて、八時頃歸宿。

七月二十五日(水)

午前中、オフイスに出勤。ベティト氏に面會。更にアダマス臺長に會つて、明日登山の件を打ち合はす。

午後、約束により、電車でロスアンゼルスに行き、小葉竹氏を誘ひ、共に同車して、エルモンテ村の高岡氏を訪問。ゆつくりと田舎

気分を味ひながら夕食の御馳走を頂き、雜誌數刻。十時半、カーで送られて歸宿。

七月二十六日(木)

朝九時半、オフイスの車に便乗し、美景を恣にしつゝ、ウイルソン山に登る。十一時、山頂の天文臺に到着、モナステリの一室に入る。次で計算室でエライマン、ホーグ、ストロンバーグ諸氏に面會す。――ここは海拔六千呎、全く世間離れの別天地である。巨大なる幾多の望遠鏡を友として、觀測者たちは皆女人禁制のモナステリ内に住んでゐる。市中のオフイスとは全然違つた氣分で、むしろリツク天文臺のそれに似てゐる。食堂も極めて友誼的である。

午後二時から、ホーグ氏に寫眞陳列館、百インチ及六十インチの兩望遠鏡を見せて貰ふ。

夜はホーグ氏の、六十吋望遠鏡による分光觀測を見る。今夜は新任臺長アダマス氏の招宴で、エライマン、ストロンバーグ、メリル氏等は夕方下山、夜半再び登山して來られた。

七月二十七日(金)

朝食後、小フマソン氏が六十呎高塔望遠鏡で太陽の分光像を撮影して居るのを見、それから、百五十呎高塔の中に行つて、エライマン氏から同望遠鏡の觀測法を説明された。

晝食後、小フマソン君と共にエレゾーター仕掛で百五十呎の塔の上に登りつめ、天上から見下す下界の景色を賞す。

午後三時、計算室でメリル氏に面會。それから又、丁度近頃アシントンから來着し、目下、山上に住居してゐられるCGアボット教授に面會。アボット氏は特に自分に太陽常數と太陽面の活動との相關研究をさめられた。――夕食後、自分はアボット氏の宅を訪ひ、さきの研究の方法につき意見をきく。これはアダマス氏の了解によるものらしい。

夜、例週の通り、六十吋反射鏡は一般民衆に開放せられて、ホーグ氏が土星や木星を見て説明してゐる。自分も小フマソン氏と、御隣りの六十吋二三の天體を見、九時からはメリル氏が百吋反射鏡で變光星の分光寫眞を撮影してゐられるのを訪れて、いろいろ説明をきいた。